

『和漢朗詠集』中の日本漢詩について

山野 清二郎

序

平安時代に貴族の間で盛んに朗詠され、当代の詩文と歌との享受の様を知るに、この上ない資料として『和漢朗詠集』のあることは、夙に名高いところである。編者が当時詩歌管絃第一の人と称された四条大納言藤原公任であったこともさることながら、採録された詩歌の多さ（八〇四首）、後代の日本文学に与えた影響力の大きさ等は計り知れないものをもっている。しかし、それではこの集が現在のどのくらい内容面からその編集意図に副うような形で鑑賞されているかという点、決して満足の行くあり方を示しているとはいえないようである。

ところで、この『和漢朗詠集』の「和漢」の意味であるが、かつては「日本漢詩」と「漢詩」のこととし、しかも和歌は公任ならぬ後人の追加によるとの説も出されたことがあった。しかし、山田孝雄氏の『倭漢朗詠集』¹⁾に周到な反対説が出て以来、今日では「和」は「和歌」、「漢」は

「漢詩」であり、しかも和歌は当初から収められていたことに落ち着いて異論はない。

が、翻って、では何故上記のような「和」を「和歌」とせずに「日本漢詩（以下日本詩と呼んで叙す）」ととる誤解が生じ得たのかということになると、意外と顧みられることが少ないようである。ここでは勿論それを敢えて生き返らせようと試みるわけではない。問題は、「和」を「和歌」の意と決めてしまうことによって、日本詩が即ち漢詩の方に分類され、本来あったであろう漢詩と日本詩との間に見られる差異が、考慮されなくなってしまふという弊害を生んではいまいかという点である。和歌と漢詩との形態上の差は一目瞭然であることは言を俟たない。内容上においても両者には大きな開きがあることも疑いを容れまい。むしろ、和歌と漢詩との間に横たわる大きな溝を認めながらも、両者が一集中に共存させられていることこそ、この集が特異なる古典たり得ている大きな要素であろう。しか

し、それでは、日本詩は和歌と漢詩との間に開かれた溝ほど漢詩との間に差を持たず、要するに漢詩の一種とみなすことで能事足るのであるうか。耳で聞き、読んで理解するに際して、集中の漢詩と日本詩との間には、ほとんど違いを感じないほどの親近さがあるのだろうか。両者を詳細に読み比べてみるならば、今や影の薄くなったかに見える日本詩が、実は漢詩に對峙するものとしてその間に一線を引き入れるべきこと、その上で改めて日本詩と和歌との関連を考えてみるべきこと等がわかってくるように思われてならない。

ここでは、『和漢朗詠集』の成立やその後代への影響等のことは措いて、既存の集中から、日本詩がどのような位相を持ち、また集中においてどのような位置を与えられるべきかを考察してみることとしたい。(なお、紙幅に限りあるため、ここでは集中の賦・序・文などは除く形で論じた。ために論点に変動の起る虞れはない。)

一

はじめに、外形上から、『和漢朗詠集』中における漢詩文と日本詩文とのかわりを考えてみよう。収録された漢詩全文三三四のうち長句三九・詩句一九五に對して、日本詩文は全三五四のうち長句一〇一・詩句二五三と、いずれ

においても日本の作品は数の上で上まわっている(和歌は二一六首)。このことをもって直ちに日本詩の漢詩に對する優位性を云々するわけにはいかないが、編者がこの集を編むにあたって、日本詩にかなりの比重を置いていたということだけは、まず言い得るであろう。

さらに、この集は上下の巻それぞれが「立春」とか「鶯」とか「紅葉」とかの項目のもとに詩歌を並べているという体裁を持つ。これには、中国の類書の投影があり、本集に先だつ『千載佳句』(大江維時撰九六〇年頃)にも採られた方法であつたといふ。ところが、本集に収められている漢詩についてみると、出典となる原詩の題は、このような「詠物」的なものは至って少なく、多くは生活の営みの中のある目的のもとに詠まれた詩中に、季節の風物が盛られたり、ある事象が繰り入れられたりしているわけである。そうした詩の一部分を抜き出して、四季や雑の部類の中に据えて鑑賞に供するのであるから、漢詩の一首全体を貫く一つの思想のようなものは当然捨象されてしまい、恐らくは朗詠に適したであろう対句の妙などを味わうというような、ある意味ではまことに恣意的な編まれ方がなされているわけである。これは、日本詩についてもほぼ同様であるが、ただ日本詩の場合、出典によってその詠まれた詩題を

みてみると、多くが「詠物」詩になっており、百を越える項目の約三分の二が、採録された日本詩の詩題と多少の揺れこそあれ重なるのである。このことは、本集の部類項目の立てられ方が、まぎれもなく日本詩の方に優勢であったということを示しているといつてよい。

もっとも、採られた詩句の内容が項目にどれほど適っているか否かが問われればよいのであって、何を題として詠じたのかは問題ではないという見方があるかもしれない。一首の詩を完成されたまとまりあるものとして採択する基本姿勢がない以上、部分的に項目と一致するものがあればよいともいえるのであるから。しかし、それは認めるにしても、かくの如く日本詩の詩題の多くがその項目に合致しているということは、当時の日本詩がどのようにして作られていたかを語るものであり、それはまた、このようなアソロジーを作る際の一つの基準にもなっていたと思われる以上、一概に無視できないことといわねばならないであろう。すなわち、こうした背景の上に本集の撰があつたということ自体、外形面からみて本集の基本は、まず日本詩にあつたということが窺い知られるのである。

さらにつけ加えるなら、一体当時の日本詩は漢詩に対してどのような意識の違いをもつて受けとめられていたので

あろうか。漢詩は唐土において既に作られた範とするに足るもの、日本詩はわが国風土の中に生まれ、同時代的作品として身近に享受されるものとしてあつたことは確かであろう。さらに、『萬葉集』から平安初期の漢風謳歌時代を経た後に編まれた『古今和歌集』以下の歌々が、多く漢詩的発想を受けたものとして登場してきたという成果を踏まえて考えるならば、漢詩と和歌との間にある種の通いあうものが醸成され、それが日本詩創作の際にも何ほどの影響を与えたであろうことも想像に難くない。然して、そうして出来た日本詩は、漢詩との間に、和歌同様に通いあうものを持つとともに、通いあわない独自性をも持つという二面性を有していたに相違あるまい。そして、その日本詩の持つ性格に、当の編者を含めて当代作家が、劣等意識を濃厚に持っていたならば、このような漢詩を上まわる数の日本詩が採録されるということは、あり得なかつたのではないだろうか。裏返していうならば、日本詩に強い愛着心、もしくは日本詩をそれなりに是と認める意識が持たれ、その意識のもとに本集は編まれるに至つたということも考慮のうちにに入れてよいであろう。

ここで、漢詩と日本詩との読み比べによって、その差が特に述べたてるほど大きくないならば、日本詩も漢詩も広

く中国的文芸という扱いにし、従来の見方通り、それらと和歌との二つのジャンルの接合作品集ということではよいが、もし日本詩がより和歌に近いものを持つとすれば、それは形こそ漢詩の体に倣ってはいるが、内実は和歌的という、いわば漢詩と和歌との中間に位置させるべき、独自の意味を有する作品を大量に抱える集となり、本集はむしろこの独自の意味を持つ日本詩を評価し、それを中心に成立しているとみる見方が可能になるであろう。

それでは、漢詩と日本詩との間において、また日本詩と和歌との間において、どのような違いが見つげ出せるのであろうか。すべてにわたって逐一その違いは云々できないが、いくつか類型的なものを挙げて、述べることにしよう。

二

まずは、漢詩と日本詩との比較にあたって、字句も内容も似ているものからみていってみよう。⁽⁵⁾

19 野草芳菲紅錦地 野草芳菲たり紅錦の地
遊絲繚亂碧羅天 遊絲繚乱たり碧羅の天

(劉禹錫「春日書懷」)

22 著野展敷紅錦繡 野に著いては展敷す紅錦繡
當天遊織碧羅綾 天に當つては遊織す碧羅綾

(小野篁「内宴春生」)

「春興」の項のものであるが、22の詩句は19に基づくといわれる。うららかな春の光景を詠み、両首ほとんど同内容になっているかに見えるが、19が前句と後句とで地と天、紅と碧、拡大と収斂、静と動等の対でみごとに春色を描き出しているのに比して、22はそれを大幅に踏襲しながらも、自然を縫物や織物にうたい込めたがためにイメージの幅は却って狭められる結果となり、静と動との対比も消えた、まるで平板な絵画とでもいうような世界しか描き出していないことが読みとれるであろう。同じような例として、

501 礙日暮山青簇々 日を礙ふる暮山は青くして簇々たり
浸天秋水白茫茫 天を浸す秋水は白くして茫茫たり

(白居易「登西樓憶行簡」)

508 山成向背斜陽裏 山は廻背を成す斜陽の裏
水似廻流迅瀨間 水は廻流に似たり迅瀨の間

(大江朝綱「春日山居」)

「山水」の項に収めるものであるが、501の青と白とのイメージが織り成す、山と水の宇宙を庄せんばかりのスケールの雄大さに比し、508は同じ山水をうたいながらも、山や水をこまやかな観察眼でもって捉え、イメージを拡げない言わば一種箱庭的とでもいうような世界を作り出しているのである。もう一例挙げると、

624 風飄白浪花千片 風白浪を飄す花千片

鴈點清天字一行 雁青天に点ず字一行

(白居易「江樓晚眺」)

628 一行斜鴈雲端滅 一行の斜雁は雲端に滅えぬ

二月餘花野外飛 二月の余花は野外に飛ぶ

(源順「春日眺望」)

「眺望」の項のものであり、ともに雁・花を材にしている点で内容的にやや近い。しかし、一読して呼び起されるイメージには、相当の開きのあることがわかる。624では浪・花・雁・天と眼に映ずるものがすべて生きたまの姿で雄大な世界を構築しているのに比べ、628は雁も花もともに雲や野に消えて行くという、言ってみれば先細り型のイメージになってしまっているのである。

すべてがこのようなわけではないのであるが、漢詩に比べ日本詩は風土上の違いもあってか、自然を捉える点で雄大さに欠け、イメージも矮小になっている憾みが残るということがまず指摘できる。小さくそれなりにまとまっています、力強さを欠く詩が多いのである。……①

こうした詩がありながらも、一方では、漢詩の世界に迫らんとばかり、中国的装いを凝らして拡がりをねらった日本詩もかなりある。たとえば、次のような例である。

87 白片落梅浮澗水 白片の落梅は澗水に浮ぶ

黃梢新柳出城墻 黃梢の新柳は城墻より出でたり

(白居易「春至」)

90 青絲繡出陶門柳 青絲繡り出す陶門の柳

白玉裝成庾嶺梅 白玉装ひ成せり庾嶺の梅

(大江朝綱「尋春花」)

「梅」の項の詩句であるが、ともに梅と柳とを詠み込みながらも、その描き出す空間の拡がりようは全く違う。87が自然の景の中で梅や柳を思う存分ふるまわせ、巧まずして広さを出しているのに比べ、90の方は故事や名山を使い、そのイメージの助けを借りて空間を拡げているにすぎず、ために梅も柳も具象性を欠いてしまっているのである。項目を異にした詩句であるが、次のような例もそれに近いといえよう。

243 嵩山表裏千重雪 嵩山表裏千重の雪

洛水高低兩顆珠 洛水高低兩顆の珠

(白居易「八月十五夜同諸客翫月」)

255 天山不辨何年雪 天山には弁へず何れの年の雪ぞ

合浦應迷舊日珠 合浦には迷ひぬべし旧日の珠

(三統理平「禁中翫月」)

前者は「十五夜」、後者は「月」の項に入れられているも

のであるが、243の立体的な構成の中で生かされている月光の姿が、255の方になると、天山・合浦の地名や故事を引きながらも、ただ月の白い光のイメージを懷疑的平面的に描いただけの効果しかあげていないことがわかるであろう。

日本にいて唐土のことを詩中に詠むとなると、それだけではあるが、こうした一種の背伸びは、知識をひけらかすことにもなるのだろうか、理屈っぽい詩を生み出し、興趣をそこなう危険性も出てくる。次の例などそれにはいろいろか。

387 氷消見水多於地 氷消えて水を見れば地よりも多し

雪齋望山盡入樓 雪齋れて山を望めばことごとく楼に入る

(白居易「早春憶遊思黯南莊」)

388 氷消漢主應疑霸 氷消えては漢主覇を疑ふべし

雪盡梁王不召枚 雪尽きては梁王枚を召さず

(尊敬「早春雪水消」)

「氷」の項の詩句であるが、これも材を同じくしながら、後者の日本詩の方は、自然を理屈でしか捉えていないものになってしまっているのがわかる。自然の景物をそのままでなく、漢詩文学的教養を下敷きにし、その助けを借り

て詩を作る。これは漢詩の世界にもなくはないが、効果が十分にあがらず却って詩の生命を殺している点で、まさしく日本詩独特の姿となつていよう。……②

さて、そうした理は当然、詩をまじめで固く面白味のないものにしてしまふ。漢詩の軽妙洒脱さに対して、ひどく固苦しい日本詩を見ることがとなる。次の例などがそれに当らう。

103 漸欲拂他騎馬客 漸くに騎馬の客を払ひさけんと欲す

未多遮得上樓人 いまだ多くは楼に上る人を遮り得ず

(白居易「喜小樓西新柳抽條」)

109 潭心月泛交枝桂 潭心に月泛んで枝を交ふる桂

岸口風來混葉蘋 岸口に風来つて葉を混ざる蘋

(菅原文時「垂楊拂綠水」)

「柳」の項の詩句であるが、103の柳の性質にも似た軽やかさに対して、109の何と柳を詠むことの一途であることか。

対もみごとでそれなりに当時感心せられたものとは思ふが、ゆとりから来る味わいという点では、固く狭くて心が和めないのではないだろうか。それは次のような詩句についてもあてはまらう。

511 洲芳杜若抽心長 洲芳しくては杜若心を抽でて長ぜり

沙暖鶯鶯敷翅眠 沙暖かにしては鶯鶯翅を敷いて眠る

(白居易「昆明春水滿」)

517 沙頭刻印鷗遊處 沙頭に印を刻む鷗の遊ぶ処

水底模書鴈度時 水底に書を模す雁の度る時

(大江朝綱「題洞庭湖」)

「水」の項のものであるが、511の詩句の中から醸し出されてくる暖かいイメージに比して、517の詩句の何と賢しらめであることか。前句に千鳥の踏み跡が文字だという故事をふまえ、後句に雁のたよりは手紙だとの故事を敷いてい(7)る。こうなると、詩というものは知識人を満足させる語句を持つことこそ意義があるとでもいうような、遊びに堕してくるのではなからうか。こうした傾向が高じてくると、次のような少々嫌味がかつたものとしか思えないような日本詩が出てくる。

266 霜蓬老鬢三分白 霜蓬の老鬢は三分白し

露菊新花一半黄 露菊の新花は一半黄なり

(白居易「九月八日酬皇甫十見贈」)

269 鄜縣村閭皆潤屋 鄜県の村閭は皆潤屋す

陶家兒子不垂堂 陶家の兒子は垂堂せず

(三善清行「菊散一叢金」)

「菊」の項の詩句であるが、266の一読明快の句に比べ、269の方は、鄜県の甘谷のことか陶淵明家の菊の様子等を知

っている者でなければ、何が何だかわからない詩になってしまっている。まさに典故に溺れた作品といってよいであらう。……③

以上のものとはやや違った意味で、内容的に漢詩の世界からはずれたものとして挙げられるものに次のような例がある。

176 葉展影翻當砌月 葉展びては影翻る砌に当れる月

花開香散入簾風 花開けては香散ず簾に入る風

(白居易「階下蓮」)

177 煙開翠扇清風曉 煙翠扇を開く清風の曉

水泛紅衣白露秋 水紅衣を泛ぶ白露の秋

(許渾「秋晚雲陽驛西亭蓮池」)

179 緣何更覓吳山曲 何に緣つてか更に吳山の曲に覓めむ

便是吾君座下花 便ちこれ吾が君の座下の花なり

(醍醐天皇「千葉蓮花屏風詩」)

180 經爲題目佛爲眼 經には題目たり仏には眼たり

知汝花中植善根 知んぬ汝は花の中に善根を植ゑたりと

いふことを

(源爲憲「石山寺小池蓮」)

いずれも「蓮」の項の詩句であるが、前二者の蓮の感覺的・絵画的な描写の漢詩句に対して、後二者の日本詩は、いず

れも蓮のイメージを仏教色でもって捉えるという形で出来上がっている。漢詩に仏教色はなかなか溶け込めなかつたというが、日本では『萬葉集』の頃から早くも仏教が文芸に顔をのぞかせていたという事情があった。が、それにしても、一つの自然物に対してかくも顯著にその描き出すイメージが異なるということは、漢詩と日本詩との差の中の重要なものの一つに教えあげてよいであろう。これは、直接仏教の内容を主題としたものについても、程度の違いをみせている。たとえば「山寺」の項のものについてみると、

578 千株松下雙峯寺 千株の松の下の雙峯の寺

一葉舟中萬里身 一葉の舟の中の万里の身

(趙嘏「四祖寺」)

582 人如鳥路穿雲出 人は鳥路の如し雲を穿ちて出づ

地是龍門趁水登 地はこれ龍門水を趁めて登る

(菅原道真「遊龍門寺」)

のように、仏教のことよりも風景の方を主に詠じたものもあるが、同じように風景を詠みながらも、次のように仏教色を出した日本詩も出ている。

584 泉飛雨洗聲聞夢 泉飛んでは雨声聞の夢を洗ふ

葉落風吹色相秋 葉落ちては風色相の秋を吹く

(高丘相如「石山寺作」)

ここには、風景の中に法華経や華嚴経に基づく語句(声聞・色相)が込められていて、やはり題目にひかれた内容が出て来ているといえる。勿論、この現象が日本詩特有のものとまでは言いきれまいが、詩文中に仏教的知識を介入させるということは、集中の日本詩文によく見られる特徴といつてよい。この傾向がもっと徹底すると、次の詩句のよう自然を仏教的視点から眺めるといふものになる。

583 三千世界眼前盡 三千世界は眼の前に尽きぬ

十二因縁心裏空 十二因縁は心の裏に空し

(都良香「晚夏遊竹生島述懷」)

この詩句の意味するところは、一望のもと見渡せる琵琶湖の雄大な状景を「三千世界」と表わし、島の寺に立っての心境を「十二因縁」なる語をもってしている。こうした詩句は、「山寺」中の漢詩の方には全く見られないところなのである。……④

さて、こうした例をさらに追ってみると、たとえば、中国文学には『楚辭』に代表される南方系文学からの伝統になる無常感があったも、仏教的無常観の芽生えは四世紀以降からで、それも詩文に登場するのは伝統的な無常感の方であつて無常観は少ないという。いま『和漢朗詠集』の中

の「無常」の項の漢詩句をみてみると、

790 觀身岸額離根草 身を觀ずれば岸の額に根を離れたる草

論命江頭不繫舟 命を論ずれば江の頭に繫がざる舟

(羅維〈嚴維の誤りか〉)

791 年々歳々花相似 年々歳々花あひ似たり

歳々年々人不同 歳々年々人同じからず

(宋之問「有所思」)

792 蝸牛角上爭何事 蝸牛の角の上に何事をか争ふ

石火光中寄此身 石火の光の中に此の身を寄せたり

(白居易「對酒」)

そのいづれをとってみても、仏教思想や經典に依っている
と断すべきものはない。人生のはかなさを嘆く無常感はある
けれども、仏教的無常觀をはっきり出すところまでは行つて
いないといえよう。これに対して、日本詩句の方をみてみる
と、

794 朝有紅顏誇世路 朝に紅顏あつて世路に誇れども

暮爲白骨朽郊原 暮に白骨となつて郊原に朽ちぬ

(藤原義孝)

795 雖觀秋月波中影 秋の月の波の中の影を觀ずといへども

未遁春花夢裏名 いまだ春の花の夢の裏の名を通れず

(大江朝綱「送僧歸山」)

794は後世の蓮如の「白骨の文章」などにも引かれて名高い

ものであるが、直接仏教に結びつく語句はなく、これは措
くとしても、実はこの兩詩句の前に「793生者必滅 釋尊未
免栴檀之煙……」の願文が置かれていることからして、日
本詩の方の無常は正しく仏教的色彩を帯びている。795の前
句は維摩經の文句に依る觀方であること柿村重松氏『和漢
朗詠集考證』⁽¹⁰⁾以下の諸注に述べるところである。こうみて
くると、「蓮」の項以下、日本詩の中には漢詩とは異質の仏
教色あることを知るのであり、ここにも一つの違いを指摘
することができるであらう。……④

最後に、漢詩の体をとつていながらも、一読していかにも
も日本詩でしかあり得ないと思われる詩を挙げてみよう。
描き出した世界のあまりの狭小さと散文的な内容には、特
に多くの説明を要しないであらう。(120121合わせて一絶)

120 花飛如錦幾濃粧 花飛んで錦のごとし幾くの濃粧ぞ

織著春風未疊箱 織著るものは春の風いまだ箱に畳まず

121 始識春風機上巧 始めて識んぬ春の風の機上に巧なるこ

とを

非唯織色織芬芳 ただ色を織るのみにあらず芬芳をも織

る

(源英明「落花散如錦」)

「花」の項のものであるが、ひたすら散り敷いた花の有様を詠じたのみで、イメージの拡がりはない。次の詩も同類とみてよいだろう。(225 226 合わせて一絶)

225 由来感恩在秋天 由来思ひを感じせしむること秋の天に在り

多被當時節物牽 多くは当時の節物に牽かれたり

226 第一傷心何處最 第一に心を傷ましむることは何れの処にか最れたる

竹風鳴葉月明前 竹風葉を鳴らす月の明らかなる前

(島田忠臣「秋日感懷」)

「秋興」の項の中の詩であるが、二十八字を費して、秋の心傷ませるものは月明に風が竹の葉を鳴らすことだと、散文的に述べただけのものである。ここには、いかに体こそ漢詩に似せてはいても、漢詩の世界のような多元的イメージ空間はなく、一つの対象に向けて言を凝縮させて行く、言ってみれば和歌の世界に半ば足を踏み入れなかった詩のありようを見るのである。……⑤

以上、ざっとではあるが、漢詩と日本詩との間に見られる相違を挙げてみた。こうした内容上の違いを、当時の貴族たちが全く意に介さず、形態の同等さから一つの漢詩世界と感して疑わなかったとは思ひ難いことが、納得される

であろう。そこで、とりあえず漢詩と日本詩とを分けてみた場合、日本詩と、その後が続けて掲げられている和歌との関係には、どのようなことが指摘できるであろうか。

三

前述の如く、漢詩と和歌との差については、形態上からも内容上からも大きな隔りのあることは再説を要すまい。しかし、『和漢朗詠集』では、詩も文もきわめて不本意な抜粋をされてしまっているので、ある部分しか知らされず、従ってその限りでは漢詩は和歌の方に歩み寄りされているともいえる。それにも拘らず、漢詩は多く己れの領域を蔽然と保っており、そこにやはり同質化され得ない世界のあることを知るのである。それは次の例を比べあってみれば、了解されよう。

491 黛色迥臨蒼海上 黛の色は迥かに蒼海の上に臨めり

泉聲遙落白雲中 泉の聲は遙かに白雲の中より落つ

(賀蘭遂「百丈山」)

496 名のみして山は三笠もなかりけり朝日夕日のさすをいふ

かも (よみ人不知)

497 雲のあるこしの白山老いにけりおほくの年の雪つもりつ

よ (壬生忠見)

「山」の項のものであるが、どちらの和歌も、491の描く壮

大なる山の景観⁽¹⁾とは著しくかけ離れ、対象を絞った上で言葉

の機智諧謔を駆使して心情に訴えるという、およそ正面から大自然に対峙するだけのスケールは持たないのである。さらに、集中、漢詩句一首、和歌一首だけからなる「春夜」の項から引くと、

27 背燭共憐深夜月 燭を背けては共に憐れむ深夜の月

踏花同情少年春 花を踏んでは同じく惜しむ少年の春

(白居易「春中與盧四周諒華陽觀同居」)

28 春の夜のやみはあやなしむめの花いろこそみえね香やはかくるる (凡河内躬恒)

漢詩が材を揃えて、いわば総合的に雰囲気を感じたてているのに比して、和歌は材を自ら限定し、その中から何かを見つけ出そうとする方向性を企図しているといえるのであるまいか。

さて、それでは日本詩と和歌とではどうであろうか。日本詩が漢詩との間に差を持つからといって、そのすべてが直ちに和歌に近くなるわけではない。しかし、その中には、非常に発想の上で和歌に近いものがあるのは事実である。たとえば、「蟬」の項の中の次の例をみてみると、

196 歳去歳來聽不變 歳去り歳來つて聴けども変ぜず

莫言秋後遂爲空 言ふことなかれ秋の後に遂に空しく為

んなむとすといふことを

(紀長谷雄「聽初蟬」)

198 これを見よ人もとがめぬ恋すとてねをなく虫のなれるすがたを (源重光)

時代的に後に作られた198の歌が、196の詩に近くなったというよりも、むしろ詩の方が歌に接近していると言った方があたっているような作品である。次のは「早秋」の項の例である。

210 炎景剩殘衣尙重 炎景剩さへ残つて衣なほ重し

晚涼潛到簾先知 晚涼潜かに到つて簾先づ知る

(紀長谷雄「立秋後作」)

211 秋たちていくかもあらねどこのねぬるあさけの風はたもとさむしも (志貴皇子?)

これは歌の方が早く出来ていたようであるが、詩の方は196の詩と同一作者のものであるので、この傾向はあるいはこの詩人のみのこととも思われる故、さらにもう一例挙げてみよう。「古京」の項のものである。なお、この項には左の日本詩と和歌の二作品しか採られていない。比較には一番適した例といえるかもしれない。

528 緑草如今麋鹿苑 緑草は如今麋鹿の苑

紅花定昔管絃家 紅花は定めて昔の管絃の家

(菅原文時「過平城」)

529いそのかみふるき都にきてみればむかしかさしゝ花さきにけり
(よみ人しらす)

528はそれなりに対を巧みに用いた詩となっているが、構成が単純で平板なためであろうか、あるいは対象が限られたためであろうか、スケールの大きさが見られず、イメージ的にも発想の上でも、歌にそれだけ近くなっているのがわかる。これに類するものは、賦や文まで含めるならば、もっと多くの例を挙げ得るはずである。

さて、上記のほかに、日本詩の中には発想の類似以上に、そのまま翻訳すればほとんど和歌になってしまいそうに思われるものもある。

275頭目縦隨禪客乞 頭目をばたとひ禅客の乞はむに随ふとも

以秋施與太應難 秋をもつて施し与へんことはなはだ難かるべし

(源順「山寺九月盡」)

「九月盡」の項のものである。この項目自体、日本的なものなのであるが、⁽¹²⁾ 仏教的内容もさることながら、九月の日にあたって秋を施与物とすることは困難だという見方は、歌に十分通ずる内容のものであろう。同様の例とし

て、

282曉露鹿鳴花始發 曉の露に鹿鳴いて花始めて発く
百般攀折一時情 百たび攀ぢ折る一時の情
(菅原道真「秋歌」)

「萩」の項中唯一の詩句であるが、萩を鹿鳴草ということから、この形で「萩」の項に入れたものであろう。なお、この詩句は『新撰萬葉集』からのものであり、この集中の詩は和歌を基に創作されたものと推定⁽¹³⁾ されているくらいであるから、詩と歌とが近いというのはむしろ当然といえよう。次の「前栽」の項に載せる詩句も、この類であろう。

297閑思看汝花紅日 閑かに汝が花の紅ならむ日を見むことを思へば

正是當吾鬢白時 正にこれ吾が鬢の白からむ時に当れり
(慶滋保胤「初殖花樹」)

対句を用い漢詩的装いをしているが、花をわが身にひきつけて叙している。いわば詩の衣を着て花と対話している歌とでも呼ぶのが似つかわしそうな作品である。「戀」の項の中の次の例はどうであろう。

784聞得園中花養艶 聞き得たり園の中に花の艶を養ふこと
を

請君許折一枝春 君に請ふ一枝の春を折らんことを許せ

(紀齊名?)

美人を花に喩えて、どうか一人を頂戴したいと望んだ詩であるが、歌でも十分詠める内容のもので、やはり和歌の詩と呼んでさしつかえないのではなからうか。

日本詩の翻訳が、ほとんどそのまま後世、和歌となったものとして、次の例を挙げることができる。「秋興」中のものである。

24 物色自堪傷客意 物の色は自ら客の意を傷ましむるに堪

へたり

宜將愁字作秋心 宜なり愁の字をもて秋の心に作れるこ

と

(小野篁「客舍秋詞」)

崇徳院に百首歌たてまつりける時、秋のうたとてよめ
る 藤原季通朝臣

ことごとかなしかりけりむべしこそ秋の心をうれへと
いひけれ (千載和歌集巻第五秋歌下)

こうした例を見て行くことによって、日本詩の世界が殊の外和歌に近い状態にあることを知るのであるが、最後に、日本詩一首和歌二首のみからなる「女郎花」の項中の詩をみてみるならば、これはもう歌を翻訳して一篇の雑言詩を作ったと思えないであろう。

279 花色如蒸栗 花の色は蒸せる栗のごとし

俗呼爲女郎 俗呼ばうて女郎となす

聞名戯欲契偕老 名を聞きて戯れに偕老を契らむとすれ

ば

恐惡衰翁首似霜 恐るらくは衰翁の首の霜に似たるを惡

まむことを

(源順「詠女郎花」)

次に続く和歌を示せば

280 をみなへしおほかるのべにやどりせばあやなくあだの名

をやたつべき

(小野美材)

281 をみなへしみるに心はなぐさまでいとむかしの秋ぞ恋

しき

(藤原実頼)

男の文学とさえいわれた詩が、かくも優しく和歌の世界に
おりてきて、抱擁しているのである。このような日本詩の
和歌への歩みよりは、勿論、長い漢詩漢文の受容時期を経
過した末に、起ってきた現象であることはいうまでもない
ことであるが、そうした成果を踏まえて成った『和漢朗詠
集』において、日本詩の位置を改めて見直してみようなら
ば、それはどういうことになるであろうか。以下にまとめ
てみよう。

結

二において日本詩と漢詩との間に見つけ出せた相違の特徴①⑤は、多くの点でそのまま和歌と漢詩との違いに通ずるものであろう。イメージの矮小さ、理屈っぽさ、対象へのひたすらなる沈潜、仏教的色彩、無常観。このことは、振り返りみれば、取りも直さず日本詩と和歌との親密さを示すことにならう。勿論、日本詩と和歌との間に横たわる形態上の差は歴然たるものがあるし、内容的にも日本詩で漢詩に近いものは、ここに挙げ得なかつたが、かなりある。その意味では、日本詩は半分漢詩であり半分和歌であるような、漢詩と和歌との両面に通じ合うものを有しているといえる。

一方、和歌と日本詩との類似にも注目すべきもののあることは、三で述べた通りである。むしろ、日本人の制作という視点を重視するならば、日本詩は和歌の方に近いとみた方があつてゐるかもしれない。すると、この日本詩の扱いは、従来のように、「和」は「和歌」であり「漢」は「漢詩」だという大まかな分類に従わせられている限り、その存在すら無視されかねない。ここで、はっきり日本詩を漢詩から離して考えようとすると、それでは日本詩の行き場所は、どこになるのであろうか。

前述した如く、編者藤原公任は当代一の和漢に通じた学

者であつたこと、集中では日本詩こそ最大の数を誇る作品であること、四季や雑の項のうち約三分の二に日本詩の詩題が重なること、こうした事実の内容面での日本詩の姿を加添してみるならば、実は『和漢朗詠集』の本当の支柱は、この日本詩であつたといわざるを得なくなるであらう。いわば、日本詩が前に漢詩、後に和歌を掲げている形なのである。それでいながら、この集は、時として項中に漢詩・日本詩のどちらか一方を欠いたりするのだが（漢詩文を欠くもの十一項、日本詩文を欠くもの四項）、和歌だけは必ず各項に置くことを忘れない。和歌に対する愛着も強いのである。さすれば、この状況を大きくとらえるに、人は漢詩の世界からはいって日本詩の世界に十分遊ぶことによつて、いつの間にか和歌の世界へと導かれる、そうした過程のいわば中心軸、立役者が日本詩であつたといえよう。このことは、漢詩と和歌とが日本詩と手をつないだ形で朗詠された、いや日本詩を媒介としたからこそ異ジャンル作品の朗詠がなめらかに成り立ったとさえ言つてよいのではあるまいか。『和漢朗詠集』の「和漢」の語は、表向きは「和歌」と「漢詩」との意味ではあつても、その陰に隠れて見えにくい、従つて意識もされにくい日本詩（和詩）が、実は暗示されてもいた名称のように、私には思われるのであ

る。これは僻目であろうか。

(埼玉大学)

註

(1) 『岩波講座日本文学(第九回配本)倭漢朗詠集』四七頁。

(2) この数は『日本古典文学大系73和漢朗詠集』(川口久雄校注)に示すものに依った。

(3) 川口久雄『日本古典文学大系73和漢朗詠集』解説。

(4) 小西甚一「古今集的表现の成立」、安藤テルヨ「古今集歌風の成立に及ぼせる漢詩文の影響について」(ともに『日本文学研究資料叢書古今和歌集』所収)、小島憲之『古今集以前』など。

(5) 例文は『日本古典文学大系73和漢朗詠集』の本文に依る。詩句の上の番号も同書のそれに依る。以下同じ。なお例文あとの作者名及び作品名は本文にないもので、便宜上こちらでつけたものである。

(6) 大曾根章介・堀内秀晃校注『新潮日本古典集成和漢朗詠集』一七頁。

(7) 川口久雄『日本古典文学大系73和漢朗詠集』補注。

(8) 鈴木修次『中国文学と日本文学』中の『「無常」考』参照。

(9) (8)に同じ。

(10) 同書三七四頁。

(11) (6)の書一八八頁。

(12) 太田郁子『和漢朗詠集』の三月尽・九月尽(『言語と文学』第九一号)

(13) 京都大学国語国文資料叢書『新撰万葉集 京都大学蔵』

(臨川書店刊)浅見徹氏の解説。

(14) 『新編国歌大観第一巻勅撰集編』一九二頁。